

祐

たすく

YUTOKUYAKUJIN

Medical Letter

2018 SEPTEMBER

vol.

23

澄んだ青空が秋を感じさせる季節となりました。祐23号をお届けします。



医療の
現場から

from the medical front



Interview with
Hirai &
Yamazaki

「患者さんの数だけ答えがある。
一人の人として在宅支援と向き合う。」

在宅での薬物治療支援体制の整備が求められ、新たな基盤を創造する動きが高まるなか、多職種連携、情報共有による新しい地域医療システムに貢献できる薬剤師の機能拡大と薬局の機能拡張を目的とする、「在宅療養支援認定薬剤師」の資格に注目が集まっています。日本在宅薬学会が認定する資格保有薬剤師は2018年7月現在で91名。今回訪れたのは、同資格を保有する代表の平井氏が開局した東京都板橋区にある「りおん薬局」です。在宅医療を中核に据える同局の取り組みと、薬剤師としての思いを伺いました。

正しく服用してもらう
ための工夫

東京都板橋区に2017年4月に開局したりおん薬局。1階にクリニックが入るビルの2階にある同局は、在宅支援を軸にする。従業員4名の内、薬剤師は3名。「在宅療養支援認定薬剤師」の資格を持つ代表の平井文朗先生と

薬局薬剤師は、臨床の経験が少ないこともあり、在宅の現場で医療専門家の話についていけず、もどかしい思いをすることも多い。そうした悔しさを噛み締めながら、現場で経験を重ねるなかで、薬剤師としての役割を実感する日々だという。

「またどういう薬剤師になろうかと固めきれない時に、平井が在宅医療をテーマに、これからの薬剤師の役割について話をしている。自分が求めているのは、ここで、終わってすぐに詳しい話を聞きに行きました」。薬を渡して終わりではなく、効果を見極めるのが薬剤師の仕事。医師に提案をして、治療に貢献できることが薬剤師の役割だとあらためて気づいた。平井先生との出会いを、山崎先生は大事に語ってくださった。

「在宅医療に携わって10年経ちますが、毎日成長していますよ」。小さな薬局だからできることがある。う

先は末期癌の患者さんだった。週2回の訪問が基本だが、状態に異変があった場合はそれに限らない。「今日、本当は訪問日ではないんですけど、ご家族から気になる連絡が入ったから」と玄関の扉を叩く。要望には可能な限り応えたい。先生の熱い思いがひしひしと伝わってくる。患者の顔を見て服用の状況を観察することで、薬の量や回数を整える。訪問後は必ず医師に連絡を入れ、許可を得て、次の対応に動く。先回りして疑義照会をすれば、時間短縮になる。このスピード感が、多職種連携の肝になる。

「在宅医療の現場でも薬剤師が果たす機能は多様になり、新しい支援体制が求められる。患者さんの数だけ答えがある。平井先生はそうたびたび口にされた。ご家族、医師、看護師、ケアマネージャーと苦楽を共にする日々。

在宅薬剤師が関わって治療効果が出たとされている「褥瘡（じよくそう）」への薬の選択。褥瘡のような早期回復が可能になる症例を増やしたい。「そのために、現場で得た知識を学会や全国の薬剤師に積極的に共有したい」と山崎先生は未来を見据えた。

「今日は概ね4〜5件の訪問が限界という。患者さんの状態を、パズルのように組み合わせる効率良

「在宅養育支援認定薬剤師とは一般社団法人日本在宅薬学会が認定する、在宅医療支援分野で最初の薬剤師資格。第三者認証を受けた生涯研修プログラムとして公益社団法人薬剤師認定制度認証機構よりプロバイダー認証された制度。日本在宅薬学会が提唱する『新しい医療環境の創造』に向けて、在宅療養支援に関する、『知識』『技能』『態度』を備えたこれからの薬物療養をしっかりと支える事が出来る新しい薬剤師の教育、支援、情報共有を進めている。



在宅療養支援認定薬剤師 平井 文朗先生

日本在宅薬学会エヴァンジェリスト※の山崎正貴先生ともう1名だ。局内に入ると、平井先生は作業の手を止め、快活な挨拶で出迎えてくれた。

「作業を再開しながら、先生は細かにその解説をしてくださる。この患者さんはご自宅に飲んでいない薬が山のようにあったんですよ。それをまだ飲んで良いものとおそうでないものに仕分けて、お渡しする準備をしています」。医師の許可を得て、本来なら捨てられていたかもしれない薬の束をほじき、飲めるものだけを残し包みから薬を取り出す。ふたたび自動分包機で一酸化した薬に、今度は太い油性ペンでラインを引き始めた。「飲み間

違いないように、薬ごとに色を変えて印をつけてあげるんですよ」。時に目の悪い方へは、触感で薬を認知できるようにと、包みをあえてクシヤクシヤにして渡すこともある。在宅の現場では、患者本人やご家族だけでなく看護師、介護士など複数の専門家が患者を支える。正確に薬を服用してもらうのは容易ではない。処方箋が一人歩きした時に、本人はもちろん、携わる誰もがわかりやすく、正確に服用できるための工夫は、大きな意味をもつ。「過剰なサービスはしません。患者さんの自立を促すことが大事です。ただ、患者さんの顔を思い出しながら、現場が困らないようにするためのひと手間だと思っています」。残薬、誤飲、誤認。りおん薬局を訪れて数分間に、在宅支援現場の課題に向き合

く回ることも、在宅支援をする側の体力気力を維持するための大事な要素になる。その時に、集合住宅に複数の患者さんをもつことは、移動時間が短縮できる大きなメリットがある。施設運営者とコミュニケーションを図り、りおん薬局としての考えを丁寧に伝えることも大事な営業活動だ。介護施設を運営する企業との連携も増やしていきたいと平井先生は話す。

この日、3名の患者の自宅に訪問予定という平井先生の現場に同行させていただいた。一人目の訪問

「訪問を終え、薬局に戻ると、平井先生は夜のケアマネージャー向けの勉強会の準備を始めた。その間も、電話での問い合わせは途切れない。慌ただしくも、静かな活気が局内を満たしていた。

「訪問を終え、薬局に戻ると、平井先生は夜のケアマネージャー向けの勉強会の準備を始めた。その間も、電話での問い合わせは途切れない。慌ただしくも、静かな活気が局内を満たしていた。

多職種連携のためにできること



日本在宅薬学会エヴァンジェリスト 山崎 正貴先生

※日本在宅薬学会エヴァンジェリストとは日本在宅薬学会が主催するバイタルサイン講習会のトップライセンスであり、フィジカルアセスメントの基礎から応用まで熟知した薬剤師です。受講生、インストラクター、ディレクターと経てエヴァンジェリストとなります。



りおん薬局
東京都板橋区蓮沼町24-14
TEL:03-6279-8164

（一般社団法人日本在宅薬学会 ウェブサイトより引用（<https://janop.org/>））